

2011年を死刑執行停止元年に

江田五月法務大臣に訴える

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

菅直人総理による一月の再改造内閣で江田五月法務大臣が就任しました。

江田氏は裁判官出身ですが、国会議員として「死刑廃止を推進する議員連盟」に発足当初より参加されてきました。様々な人権問題に取り組みながら、参議院議長という要職まで務めた方です。

☆☆☆

検察官による証拠改竄・捏造までが明らかになり、司法制度の根幹が揺らいでいる中での法相就任です。私たちはこのような時期にあって、「人権を守る」という法務行政の原点に理解の深い江田法相の就任を歓迎し、その活躍に期待したいと思います。

そして、もっとも法相に問われる「死刑」の問題について、改めて、私たちからの要望を伝えたいと思います。

☆☆☆

昨年、九月、同じく「死刑廃止を推進する議員連盟」に参加していた、千葉景子法相（当時）が2名の死刑を執行しました。その執行と引き換えにされたのは、東京拘置所の処刑場のマスコミへの公開でした。死刑に関する情報公開をすすめ国民的議論への一助としたいということでしたが、その結果はどうでしょう。

公開されたのは、全国七か所の刑場の中でも一番新しい東京拘置所の刑場に限られた上、様々な制限がついていました。処刑場が何階にあったのかさえ、オフレコにされているのです。他の刑場の公開があくまで拒まれているのはなぜなのか。正視に堪えない状態が隠されているのではないかと、疑問は深まるばかりです。

国民的議論のために、と設置された場合も、法務官僚主導で人選された「勉強会」にすぎないではありませんか。

☆☆☆

それは、「何十人でも処刑すればよかった」と、最近になって当時のホンネを語った鳩山邦夫元法相が、かつてアリバイ的に設けた「勉強会」とどこが異なるのでしょうか。鳩山氏は、死刑廃止の市民団体からも話を聞いたあと、もういいだろうと、処刑場へのベルト・コンベアのスイッチを押し、死刑執行を乱発したのでした。

その流れの中で、DNA鑑定のやり直しを求めて再審準備中だった飯塚事件の久間三千年さんも、2008年10月、森英介法相（当時）により執行されてしまいました。足利事件で菅家利和さんの無実が明らかになりつつあったその時期、法相の任にある人が注意深く検討すれば、少なくとも久間さんの執行は控えられ、戦後五人目の冤罪死刑囚が生還できた可能性が高いのです。

問われるべき法務大臣の「職責」とは、本来、そういうことではありませんか。

☆☆☆

今年が日本における死刑執行停止元年となることを願っています。